

計報

大瀧仁志先生を悼む

平成18年11月5日未明に元・錯体化学実験施設長の大瀧仁志先生が心筋梗塞のため横浜市の自宅で死去されました。大瀧先生とは昨年8月の南アフリカでの錯体化学国際会議の計画委員会で同席し、帰国後もお会いし、お亡くなりになった数日前にも、ある問題で助言をいただいておりますので、突然のご逝去の報にただ驚くのみでございました。

私が分子研に着任した時には大瀧先生は第二代錯体化学実験施設長として錯体化学研究所設立問題ならびに錯体化学国際会議（平成4年）の準備で多忙は極められておられました。前者の問題では初代施設長の故・斉藤一夫先生、大瀧仁志先生と数多くの会合を持ちました。その過程で両先生から組織、教育、海外での研究体制等の問題で多くの教えを頂きましたが、両先生の語学力、記憶力、文章を纏める速さには驚きの連続でした。私が当時の両先生の年齢になっても両先生の幅広い知識と素養には遠くおよびませんし、今で

も、初代、第二代錯体化学実験施設長の個性と行動力には感嘆しております。私の分子研着任から錯体化学国際会議開催（京都）まで4年ほどありましたが、その期間に大瀧先生が示した強烈な責任感、行動力、国際的な交友関係には圧倒されました。分子研の定年後にはヨーロッパの某有名大学から勧誘があり、ご本人も希望されておりましたが、国際会議のため断念されました。当時、アジアとの学术交流を声高に叫ばれていた大瀧先生の行動に対して学問的メリットがないと多くの批判が寄せられており、公的な資金援助が期待出来ない情勢下でも、先生はヨーロッパの有力者の協力を得てアジア諸国の先生方と折衝されてユーラシア化学会議を設立されました。同会議は毎回、ノーベル賞受賞者か同等クラスの研究者の基調講演を行い、アジアの化学の発展に大きな貢献をしております。現在も発展し続けております。

大瀧先生がヨーロッパのみならずアジアとの学术交流と人間関係を築

くため奔走されておられましたので、私は先生が国内外の溶液化学のリーダーであることは十分承知の上で、先生が国内外の学术交流のために費やした時間を自分の専門分野の研究に費やされていたら大変な学問的業績を築かれたはずであると、何度か言ったことがあります。その度に先生は微笑みながら、これが私の生き方ですよと答えられました。大瀧先生は日本の研究者は整備された国際組織での委員は引き受けるが、組織形成の段階で指導的な役割を担わないことに不満を述べておられましたので、先生の行動は自分の哲学そのものだったと思います。私の生き方に強烈な影響を与えられた初代錯体化学実験施設長・斉藤一夫先生に続いて第2代施設長・大瀧仁志先生も他界されました。人間には様々な考え方、生き方があることを、自ら実践して我々にお示し頂いた大瀧仁志先生に対して心からお礼を申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

（田中晃二 記）



上：大瀧先生テーブルマウンテン頂上にて
左：大瀧先生との最後の写真―喜望峰にて